

広大な東海大学湘南キャンパスで、体育学部の研究室を探す。国際柔道連盟理事、全日本柔道連盟理事、東海大学柔道部部长、神奈川県体育協会会長などたくさんのお仕事に就き、多忙を極める山下泰裕の今日の顔は東海大学体育学部教授である。

山下が東海大学と縁ができたのは、高校二年の夏。「世界の山下」が、まだ「日本の山下」になる前、「熊本に怪童あり」と言われた頃、九州学院高校から東海大学付属相模高校に編入した。それからすでに三十年以上。目に浮かぶのは、やはりロス五輪での軸足の右足肉離れという重大なダメージを負いながら優勝した鬼気迫る姿である。

研究室の奥の大きなデスクの大きな椅子から、身軽な動作で立ち上がった山下は、現役当時と比べて顔のラインはやや肉が削げてすっきりした印象だが、やはり巨体。デスクの前のこぢんまりしたテーブルに録音テープをセットすると、「いつもはこのデスクで話を……」と戸惑った表情を一瞬浮かべたが、すぐに対面するソファに座った。ソファが沈む。ジャケットもズボンも、体勢の窮屈さを訴えている。しまった！と思ったが、山下の目は柔和な笑みを浮かべていた。

テーブルの上に、NPO法人・柔道教育ソリダリティーのパンフレット。「今年の四月にNPO法人を立

柔道家

柔の道は 続く

山下泰裕

現役時代、二〇三連勝という前人未到の記録を打ち立て、引退後は指導者として日本の柔道界の要となってきた。「世界の山下」が次に描く夢は、柔道を通して日本の心を世界に伝える、いわば「柔道外交」だ。

ち上げたんです」と、大事そうに手渡した。

ソリダリティーとは、連帯という意味。理事長は山下泰裕。顧問には、奥田碩・トヨタ自動車相談役、嘉納行光・講道館館長、松前達郎・東海大学総長、稲盛和夫・京セラ名誉会長の名前が並ぶ。掲げる目標は三つ。国際的な柔道の普及、柔道を通して日本の心を伝えることと国際的な文化交流、そして柔道

による青少年の育成。

「私個人としては、柔道の教材のDVDを英語、フランス語、スペイン語、アラビア語など様々な言語で作ったり、イラクの柔道連盟から畳も柔道着もすべて失ったと聞けば、いろいろな機関にお願いして畳や柔道着を贈ったりしてきました」

山下は、選手時代の自分が第一ステージ、指導者の時代は第二ステージと位置づけ、それはシドニーま

でと決めていた。そして第三ステージは、柔道の普及教育を通して社会に貢献すること。するべきことはたくさんある。が、何をすることも先立つものが必要になる。

「とにかくお金集めに飛び回ってばかり。昨年『武士道とともに生きる』という本を一緒に出した日本経団連会長だった奥田さんから、小さくてもいいから組織を作って広くたくさんの人に協力してもらって、あなたの時間を本来の活動に向けられるように考えたらどうですか？」と提案いただいた。……ほぼ一年、悩みました。

自分ひとりならどんなに大変でも、もう精一杯やったとか、疲れたとか、違うことに関心が移ったとか、やめることができる。でも、多くの人にメンバーになっていただくとなると生半可な決意じゃできない。考えて考えて、やはり意味があることだと思えたので決断しました。組織を作るのは、なかなか勇気がいるんですね」

決断の前に沈思する。自らの心に深く問いかける。山下の人柄が言葉の端々に滲み出る。これ自分分の人生の使命として取り組む。使命を果たせる組織でありたい。

「私にとって柔道とは、生きるための道なんです。勝ち負けを競うだけのものではない。柔道を通して学んできたことを日常生活に生かせてこそ道なんだと思います」

吉永みち子・文 赤城耕一・写真

text by Michiko Yoshinaga photographs by Kouichi Akagi



hitotoki interview : Yamashita Yasuhiro

【やました やすひろ】

1957年、熊本県生まれ。東海大学体育学部卒業、同大学院体育学研究科修了。小学校3年から柔道を始め、77年、史上最年少の19歳で全日本チャンピオンに。84年のロサンゼルス五輪では無差別級で金メダルを獲得。85年、203連勝の記録を残し現役を引退、指導者の道へ。全日本柔道連盟ヘッドコーチとしてアトランタ五輪、シドニー五輪の柔道男子日本チーム監督などを務める。96年から東海大学教授。著書に『闘魂の柔道』（ベースボールマガジン社）、共著『武士道とともに生きる』（角川書店）などがある。

柔道の 強さだけでは半分。

試練も悲しみも喜びもすべて人間としての強さや豊かさにつながってこそ柔の道。この思いが、昨年十二月に福岡で行われた中学生の国際柔道大会にロシアの北オセチア共和国の中学生七人を招待するために、山下を奮闘させた。

二〇〇四年、北オセチアのベスランの学校がテロリストに占拠され、子どもを含む多数の犠牲者が出るという悲しい出来事が起きた。北オセチアは柔道がさかんな地域だった。不幸な事件を乗り越えて強く生きて欲しいと北オセチアの子どもたちを招待するべく奔走する山下のことを、ロシアのプーチン大統領が知った。そして、大会の直前に日口首脳会議のために来日した折、山下と食事をともにする機会をつくっている。



プーチン大統領は、子どもの頃

から柔道を習い、旧ソ連の学生柔道大会で三位に入賞した経歴を持つ。尊敬するのは嘉納治五郎と姿三三郎と山下泰裕と公言する柔道好きとして知られている。

大統領は、山下にこう言った。

「テロで傷ついた子どもたちを柔道の交流を通して日本で励ましてくれるそうですね。ロシア国民を代表して心からお礼を言いたい」

この時、山下は自らが尊敬してやまない嘉納治五郎師範の直筆「自他共栄」という書をプーチン大統領に贈っている。

「自他共栄とは、まさに柔道の精神なんです。相手がいるから自分も強くなれる。相手は敵ではなく、何より大事なのは相手への尊敬、敬意なんです」

師範の思いがこめられた書を大統領に贈ったのは、日本とロシアがお互い敬意を持ち合いながら、共に協力し、共に発展していきたいという思いからだと言った。

その書と対面した大統領は「これは本物ですか、コピーですか」と山下に尋ねた。まさか嘉納治五郎師範の直筆を、山下が手放すわけがないと思ったのだろう。本物の価値を知る柔道家だからこそ発した素直な疑問だった。もちろん本物ですと、山下は答えた。それを聞

hitotoki interview : Yamashita Yasuhiro

いた大統領は、驚きながらこう言ったという。「私だけが所有してはもったいない。多くの人に共有の財産にしなければいけない」。

この後、山下はプーチン大統領に招かれてロシアで再会。柔道着を身につけた大統領と一緒に柔道の指導を行っている。

「国同士の関係では抱えている問題もあるでしょうが、日本のロシア観、ロシアの日本観が少しでもよくなってくればと願っています」

ロシア といえば、旧ソ連時代にアフガニスタン侵攻に抗議して日本がボイコットを決めた八〇年のモスクワ五輪のことを思い出さずには

いられない。選手として最も脂の乗り切った山下は、子どもの頃からの夢だった五輪出場と世界の頂点に立つ希望に燃えていた。五輪ボイコットが伝えられた時、山下は部屋に引きこもり、悔し涙を流し続けた。その翌日に五輪代表を決める大会があり、その試合で山下は遠藤純男のカニばさみという技で左足腓骨を骨折。全治三カ月の重傷を負い、休養を余儀なくされている。心身ともに激痛を伴う思い出であろう。

「それまで経験したことがない本当に異様な試合でした。望みを断ち切られた選手は、すっかりやる気

をなくした人、目を見失い呆然としている人、目が重走っている人と入り交じり、会場も醒めた目と同情の目でしらけたムードで……でも、今は一二〇パーセント、リカバリーしています」

四年後のロス五輪に出場を果たし、負傷しながらも優勝したことで、モスクワ五輪で奪われた機会を自分の手に再び取り戻し、果たせなかった夢を叶えたことで乗り越えられたのだろうか。では、もし観客に悲鳴をあげさせたロスの決勝戦での勝敗の行方が入れ替わっていたなら……ついそんな思いが口に出ってしまった。

「モスクワに出られなくて、ロスで負けていたらどうなったか。人生って、自分に必要なことが起きるんじゃないですかね。もし、ずっと引きずっているとしたら、僕はアスリートではあっても柔道家ではないということになる。学んだことを生かすのが道ですから」

とはいうものの、二〇〇三連勝の偉業すら達成した山下にとっては、勝つことの方が圧倒的に多い。勝利への執念が、熊本の少年を世界の山下に育てたとも言える。

「勝つことへのこだわりは、人一倍強かったと思います。勝負への執着心は誰にも負けなかった。試合に臨む時のお前の目は人殺しの目だと、

「柔道に育てられた自分に何かできることがあるとしたら、それは柔道を通してしかありえないんですね」

人から言われたこともあります」
小学生の頃から、体も大きく、
きかん気も強かった。

「最初は剣道に通ったんです。小学
校三年だったんですが、六年生くら
いの体格だったもので、重い竹刀を
買わされたんですよ。人より重い
から振ってもスピードが出ないし、
人より遅れる。何だか上達が人よ
り遅いようで、面白くなくなつてや
めたんです。もし、軽い竹刀だった
ら続けていたかもしれないですね」

剣道がダメなら柔道がある。目
的は非行防止と肥満防止である。
柔道は、体でぶつかっていけて面白
かった。

「先生の言うこととルールを守って
いけば、いくら暴れても誰にも文句
を言われぬ。柔道は、僕のありあ
まる闘争心を十分に満たしてくれ
ました。柔道の激しさに惹かれた。
顔は昔から穏やかだったんですが、
気性は激しかったんですよ」

激しく闘志をぶつけ、勝つことに
執念を燃やす山下少年に、最初の
教育的指導をしたのは中学時代の
恩師・白石礼介だった。

「勝ちにこだわってもいい。でも、目
先の勝ちではなくもつと長い道のり
の先の勝ち、人生の勝ちを目指せ
と」

その言葉が、激しさだけでは
柔道の奥の深さを少年の心に初め
て照らし出した。

現在、

一九五の国や地域に柔

道は広まっている。国際的になれば、
国際的な理解を得るためにという
理由で、わかりやすさやスピードが
求められる。山下自身、二〇〇三
年から国際柔道連盟の理事に就任
している。就任にあたり、英語をも
つと流暢に話せるようになろうと、
ニューヨークに一カ月ほど滞在して
自らに英語漬け生活を課した。そ
の時、オリンピック担当だというN
BCの副社長に会う機会があった。

「彼は言いました。どうしたらも
つと柔道が広まり、テレビでも放送
されるか。まず言葉がわからない
から面白くない。英語にしたらアメ
リカ人は理解できる。それに勝つた
らもつと派手に感情を表し、オーバ
ーアクション気味にすれば観客は喜
ぶ。そのアドバイスを聞いて、それ
こそが絶対に変えてはいけないこと



2005年9月、外務省中東ミッションにより
トルコの子どもたちと交流。

だと思いました。世の中が変わっ

ても決して変えてはいけないもの
と、時代に対応して変化していかな
ければいけないものがあると思
うんです。柔道における不易は、三
つあると思います。まず「一本」。ど
こまでも一本にこだわる姿勢。二
つめは教育的な価値。派手にヤツ
タ、ザマーミロみたいな挑発はもつて
のほか。そして言葉です。「礼」、「始
め」と言われても最初は誰もわか
らない。でもなぜ礼なのか。礼で頭
を下げるのはなぜなのか。相手への
敬意を表すのか……とだんだんわ
かってくる。それを通して、日本の
文化に興味を持ってくれる。日本
語がわからないから英語にしてし
まう。柔道着がブルーになつても柔
道は変わらないけれど、ここを変え
たら柔道は柔道ではなくなつてし
まいます」

たくさんの国に柔道を広めるこ
とで、日本を知ってもらいたい。日
本の文化、日本の心に関心を持つて
もらいたい。お互いを知り、敬意を
持ち合うことで、世界平和を実現
したい。それが山下の追い求める夢
なのである。

「第三ステージはエンドレスですね。
それが自分の人生のミッションだと
思っています」

現在、北京五輪に向けて、これま
で一度もメダルに手が届いたことが

ない中国の男子チームの強化に取
り組んでいる。日中関係が必ずし
も良好ではないからこそ、援助を惜
しまず、日本人の多い青島に柔道
場を建設し、日中の子どもたちが
柔道を通して交流してくれること
を夢見る。

求められること、求めることは、
増えるばかり。自分の時間などと
れない。

「でもね、社会貢献とか国際交流
で手一杯になつて、自分の基盤であ
る家族を大事にできないと、これも
おかしいですね。少しは自分の時間
も欲しいですよ」

申し訳なさそうに小声で呟いた。
激しくなつてきた雨の中、撮影の
ために構内の武道館に向かう。研
究室を出て、手にしたビニール傘を
早速広げて屋内の階段を降りる。
その後ろ姿が「トトロ」にそっくり
で、思わず笑ってしまった。振り向
いた山下は、あわてて傘を閉じる
と「ちゃんと開くかどうか、調べて
たんですよ」と、いたずらがバレた
子どものような笑いを浮かべた。

【よしながみちこ】

1950年、埼玉県生まれ。競馬新聞「勝
馬」、「日刊ゲンダイ」の記者を経て作家活
動へ。85年、「気がつけば騎手の女房」で大
宅壮一ノンフィクション大賞を受賞。著書
に「母と娘の40年戦争」（集英社文庫）、「ど
こゆく？ 団塊男 どうする！ 団塊女」（日
本経済新聞社）などがある。